

百草の *Helicobacter pylori* に対する抗菌活性の検討

○北川 雅一¹, 所 俊志¹, 森 裕志¹ (¹岐阜薬大 生命薬学 微生物)

【目的】 *H. pylori* は胃炎や胃・十二指腸潰瘍の発症および増悪に関与しており, *H. pylori* 感染者に抗菌剤による除菌治療が推奨されている。一方, 百草はオウバクを原料に製造される民間薬であり, 止瀉作用などが知られ, 整腸薬として用いられてきた。主要成分であるベルペリンには抗菌活性が報告されている。そこで本研究では, *H. pylori* の除菌への応用を企図して百草の *H. pylori* に対する抗菌活性を *in vitro* で検討した。

【方法】 供試菌は, *H. pylori* IID3023 とし, 37℃, 微好気性条件下, 5%ウシ血清を含むブルセラ培地で培養した。百草は, 水抽出液を検体とした。抗菌活性は, ペーパーディスク法および96穴フラットマイクロプレートを用いた軟寒天培地法で検討した。軟寒天培地法では抽出液を段階希釈して培地に混合し, 菌の増殖は595 nmにおける吸光度を測定して評価した。クラリスロマイシン (CAM) およびアモキシシリン (AMPC) を陽性対照とした。

【結果および考察】 ペーパーディスク法では, 培養直後にペーパーディスクを貼付した場合, 百草, CAM および AMPC のいずれによっても阻止円が出現した。肉眼的にコロニーが観察できる培養2日後に貼付した場合, CAM および AMPC では阻止円は出現しなかったが, 百草では阻止円が出現した。軟寒天培地法では, 百草を培養直後に添加した場合の IC₅₀ は 200 μg/ml で, 添加時期を1または2日後とした場合もほぼ同様の抑制がみられた。しかし, CAM および AMPC では添加時期を1または2日後とすると, 抑制は明らかに減弱した。これらの成績から, 百草は *H. pylori* に抗菌活性を有することが明らかであり, 抗生物質と異なる抗菌作用機序を持つと考えられた。